

---

# もう会わない。

朝川ワタル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう会わない。

### 【Nコード】

N5497U

### 【作者名】

朝川ワタル

### 【あらすじ】

私は、職場の上司であるあなたに食事に誘われ、その夜に抱かれています。

私には夫がいて、あなたには妻子があるが、私はあなたとの結婚を意識して交際する。

しかし、ある時、私はあなたが若い女と一緒にいるところを目撃してしまふ。

私は、思いあまって、探偵社にあなたの調査を依頼する。

調査結果は、私には理解できない奇妙なものだった。

誘ってくれてありがとう。

行きたいよ、もちろん。

食事に誘われるなんて本当に久しぶりだし、それに、玉家にはもう一度行ってみたかったから。

玉家で食事をすれば、もしかしたら、今までのことが全部リセットできるかもしれない、とも思ったわ。

話したいこと、聞きたいことは、山ほどある。

本当は、そういうことをきちんと話して、きちんと聞いて、それから結論を出すべきなのかもしれない。

でも、もしも、あなたの答えが私を傷つけるものなら、私はそれを聞きたくない。

もしも、あなたの答えが私を喜ばせるものだとしても、私はそれを信じられない。

だったら、話をする意味がないでしょう？

それに、あなたへの私の気持ちは、寂しさの中で少しずつしぼんでいき、死んでしまったみたいなの。

未練がないわけじゃないよ。

私が他人の心を見通す超能力を持っていて、その力であなたの心を見て、実はあなたが私を愛しているということが分かったら、きっと私は今までのことをすべて忘れてしまっくんじゃないかな。

けれど、そんな、ありえないことを想像してみても仕方がない。

あなたの私への愛情の確実な証拠を見つけることは決まてないだろうから、私のあなたへの愛情も生き返ることはないの。

だから、もう会わない。

会わないと決めたのだから、これ以上、何も書く必要はないのか

もしれない。

でも、私は書いておきたい。

なぜなら、書かなければ、あなたはまた私を誘うだろうし、私はそのたびに悩むことになる。あなたが熱心に口説けば、よりを戻してしまうかもしれない。

そして、また同じことの繰り返し。

だから、私は書くの。

私が何をして、何を知ったか。

そうすれば、きっと、あなたはもう私に近づこうとしないだろうから。

そうすれば、きっと、あなたは（今よりもっと）私を嫌いになるだろうから。

どこから始めればいいのかしら。

やっぱり玉家からかな。

あの夜のことを思い出すと、今でも身体が熱くなる。

最初のデートで、私は完全にまいってしまったのよ。

今、考えると、いきなり料亭の個室、しかも露天風呂付きの部屋に連れて行くなんで、人を馬鹿にしている、という気がするけれど、あの時、私はそんな風には感じなかった。

それどころか、閑静な住宅街にひっそりと建っている玉家の、庭の見える上品な座敷に通された時は、脳内快感物質がパアッと広がって頭がしびれたわ。

これはまぎれもなく大人の世界だ、と私は思った。

この人は大人の男だ。

こんな店に連れてくるなんて、この人はきっと本気で私を好きなんだ。

もしかしたら、今夜、プロポーズされるのかもしれない。

そんな風に私の頭の中では次々と論理が飛躍した。

私は、興奮と緊張で鼓動が激しくなっただけけれど、それを気づかないように一生懸命に平静を装った。

料理と冷酒の美味しさ、食器の美しさ、仲居さんのもてなし、どれをとっても、私がそれまでに経験したことのない、一流のものだった。少なくとも、私には、そう思えた。

酔いが回るにつれて、私はひどく楽しく気持ちよくなってきた。

自分がすごくいい女であるような気がしてきた。

ふと、こういふ場所こそ私にふさわしい、という考えが頭に浮かんだ。

これまで夫を含め何人かの男とつきあい、それ以外にも何人かの男たちと食事をしてきたけれど、誰一人として、こんな店には連れてきてくれなかった。

なぜ？

若かったから？

確かにそれもあるだろうけど、それだけじゃないような気がした。

やがて、あなたは、さらりと、私を好きになった、と言った。

私は、箸を持つ手が震えたけれど、事務的な感じで「私も好きですよ」と答えた。

恋愛感情ではない好意、というニュアンスで言ったつもりだった。でも、その言葉が口から出て、その後に沈黙が訪れると、それは恋の告白だったように思えてきた。

私は、4月にあなたが異動してきた時から、カッコいい人だなと思っていた。

副課長だから40代後半のはずなのに、どう見ても35歳くらいにしか見えなかった。

細マツチヨで、ファッションもさりげなく隙がない。

部下への指示も的確で、判断も早い。

好きか嫌いかと聞かれれば、断然好きなタイプだった。

おまけに7月に暑気払いがあつて、あなたは、最後の方で私の隣に座つて、「鈴木さんつて、いい女だね」と言ってくれたでしょう？

いい女だね、の一言で落ちてしまうなんて、我ながら本当に情けないけれど、実際、その一言で落ちてしまったの。

一体、なんて安い女なのかしらね。

ただ、その頃の私の感情がどういう種類のものだったのか、今となつてはよく分からないの。

たぶん、素直に自分の心をのぞき込めば、それは恋愛感情だったのだと思う。

でも、お互い結婚しているのだし、私には不倫とか離婚とかいう発想はなかった。

だから、そういう関係にはならない前提のささやかな恋心、とでもいうのかしら。

分からない。

そんなに純真なものじゃなかったかも。

一つ白状すると、暑気払いで「いい女だね」と言われた夜から、

私はほとんど毎日、あなたを思いながらオナニーをしていたの。  
帰り際にあなたに「お先に失礼します」と声をかけ、私を見て「  
お疲れさま」と言うあなたの顔を目に焼き付ける。

お風呂で身体を洗いながら目を閉じてその表情を思い出す。  
それが日課だった。

あなたとのセックスを想像すると、すぐにいったわ。  
ピュー、ガクガクガク、って感じ。

けれど、だからといって、私は、リアルにあなたとセックスした  
いと願っていたわけじゃないの。

漠然としたセックスへの欲求はあったし、けっこう具体的にあな  
たとのセックスを想像したけれど、それは妄想に過ぎなかったの。

これは本当よ。

夏の終わりにあなたから食事を誘われた時、「食事くらいならい  
つでも」と軽い調子でオーケーしたけれど、私はそれから1週間で  
2キロやせた。

ご飯が喉を通らなかった。

それでも、私は、それを恋の病だとは思わなかった。

もっと別の種類のストレスだと思っていた。

違うかな。

嘘かも。

でも、少なくとも最初のデートの時には何の覚悟もできてなかつ  
た。

当たり前よね？

「私も好きですよ」と私が言った後、あなたは何かを読み取るようにするみたいに、私の顔をじっと見ていた。

実際、あなたには特殊な能力があるのよね？

いつかそう言っていたでしょう？

「僕は他人の気持ちが読めるんだ。本人も気づいていない気持ちをね」って。

あの時もきつと、あなたは、私でさえ知らなかった私の気持ちを分かってしまったのでしょうか？

だから、あんなことが聞けたのよね。

「結婚2年目、僕が33歳の時に女房が息子を妊娠したんだけど、それ以来12年間、うちはセックスしてないんだ。君のところは？」

後からあなたにずいぶんからかわれたけれど、その失礼な質問に、私はバカ正直に答えてしまった。

「結婚3年目、私が30歳のときから3年間してないです」

我ながら自分の愚かさにあきれてしまうけれど、私は、あなたの話が「だから離婚しよう」と思っているんだ」という風に進むのかと思つて、ちゃんと答えなければ、と思つたの。

ということとは、つまり、その時すでに私はあなたとの結婚を考えていたのかしら。

まさか、それはないと思う。

でも、そうだったのかも。

どちらにしても、要するに、私はまじめなのよ。

あなたは相手を間違えたの。

デザートを運んできた仲居さんが出て行くと、あなたは不意に立ち上がり、私の隣へ来て、キスをした。

あなたの唇は私の唇に静かに、必要十分な強さで重ねられた。

あなたの舌はゆっくりと入ってきて、私の舌にいやらしく絡み付いた。

どう表現したらいいのか、分からない。

あんなに気持ちのいいキスは、生まれて初めてだった。

喘ぎ声が漏れ、身体がビクンビクンと震えた。

私はあなたの背中にしがみつき、夢中であなたの舌を味わった。

それなのに、あなたが唇を離れた時、私はあなたの頬を平手で叩いた。

ひどく弱々しい叩き方で。

「無理矢理キスされたということにしておきたかったんだらう？」と後であなたは笑ったけれど、本気で怒ったことは怒ったのよ。

だって、物事には順序っていうものがあるべきでしょう？

まだつきあってもいないのに、キスするなんて、ありえない、っていうのが私の考えだったの。

いくらそのキスを私の身体が受け入れたとしても、それとこれとは別。

それに、身体が反応してしまったからこそ、軽い女と思われたくなかった。

でも、そんな私のささやかな抗議を、あなたはまったく意に介さなかった。

あなたは、にっこりと微笑んで、

「風呂に入ろう」と言った。

そして、私のブラウスのボタンをはずし始めた。

なぜあの時、私は抵抗しなかったのだらう？

さつきからずっと、あの夜の自分の心の動きを思い出そうとしているのだけれど、やっぱりよく分からない。

キスだってありえないのだから、その先は当然、絶対ありえない、と思っただけなのに。

でも、あなたにキスされてから、私の中で、何か未知の快樂への

期待みたいなものが膨らんでいた。

うまく言えないけれど、それは性的快感だけでない、もっと大きな快樂の予感だったような気がする。

その得体の知れない何かを、あなたが今から見せてくれる。そんな風を感じていた。

そしてもう一つ。

私は、あなたに私の裸を見てもらいたかった。

私は、おっぱいは大きいし、ウエストはくびれているし、足は長くてきれいだと思っていたから。

こんな場所で裸になるなんてありえない、と思っていたのに、裸を見せて、あなたにほめてもらいたかったの。

自分でも矛盾していると思うけど、それが事実なのよね。

あなたはあつという間に服を脱がしてしまい、煌煌とした明かりの下に私を立たせ、裸を鑑賞した。

私は、あなたの何かしら肯定的なコメントを待っていた。

けれど、あなたは何も言ってくれなかった。

それどころか、あなたの表情には、どこか冷ややかなものさえ感じられた。

何かとんでもない間違いを犯したような気がしてきた時、私は再び唇を塞がれた。

あなたは、舌を絡ませ続けながら、器用に自分の服を脱いだ。

もう引き返すことはできなかった。

それから庭の露天風呂であなたがしてくれたことは、本当に素晴らしいかった。

あなたは、洗い場で首から下のすべての部分を丁寧に洗ってくれた後、湯船の中で首から下のすべての部分を丁寧に舐めてくれた。お尻の穴も足の指の間も。

私は薄目を開けて、あなたを見た。

ああ、この人は優しい人なんだ、と私は思った。

その時の思い込みが、今までずるずると別れを引き延ばしてきてしまった一番大きな原因かもしれない。

ふと気がつくと、空に円い月が出ていた。

庭のどこかで秋の虫の鳴き声があった。

なんて素敵な夜、と私は思った。

こんなのは初めてだ。

きつと、私の人生で、この人以外にこんな経験をさせてくれる男は私の前に現れないだろう。

私の言っている意味が分かるかしら？

住宅街の料亭、静かな庭、露天風呂、月、虫の声、クニニリングス。

その時の私の感動が、あなたに伝わるかしら？

あなたがどこまで意図していたのかは知らない。

でも、そんなことはどうでもいい。

結果がすべてなのだ。

あなたがお湯の上で私の脚を大きく開かせて、私の中に入ってきた時、私は泣いた。

なぜかは私にもよく分からない。

歓喜と後悔と恐怖。

いろんな感情が入り交じっていたけれど、やがて快感がすべてになつて、頭が真っ白になつた。

ガクンガクンガクン。

私は生まれて初めて、セックスでいった。

帰りの電車の中で、私は思った。  
楽しかった。

ものすごく。

何から何まで、と言ったら言い過ぎかもしれないけれど、初めての素敵な経験ばかりだった。

3年ぶりのセックスは、まったく痛みを感じなかった。

最初から最後まで、とろけるように気持ちよかった。

そして、怖いくらいの圧倒的なエクスタシーが訪れた。

私は中学生の頃からオナニーをしていて、オナニーでは何百回（何千回かな？）もいったことがあるのに、セックスではそれまで一度もいったことがなかったの。

なぜいけたのだろうか？ と私は考えた。

3年間の欲求不満が爆発したとか？

3年間で身体が成熟したとか？

そうかもしれない。

でも、きつと違う。

あなただから、私をいかせることができたのだ。

電車のドアに額をつけながら、私は、快樂の余韻と幸福感で満たされていた。

それなのに、胸の片隅には、まがまがしいといってもいいような、不安な気持ちがあった。

目を閉じて自分の心の中を探してみると、不安の理由が三つ見つかった。

一つ目は、さっき、あなたに打ったメールの返事が来ないことだ

った。

まだ10分しか経っていないけれど、すぐに返事をくれてもよさそうなものだ。

ていうか、あなたから先にメールを送ってほしかった。

二つ目は、私の裸を眺めていたあなたの表情。

結局、その後も、あなたは私の裸に関してノーコメントだった。

私はあなたの身体をほめたのに（実際、胸板は厚く、腹筋は割れていて、45歳とは思えない、美しい裸体だった）。

三つ目は、セックスの後、露天風呂で交わした会話だった。

「満月かしら？」

「嫌だな。知らなかったの？ 今夜は中秋の名月だぜ」

「知らないわよ、そんなの」

私の声は、その場にふさわしくない、怒ったような感じだったかもしれない。

事実、ちよつとカチンと来たのだった。

あなたは、ひどく不機嫌そうな顔になって、黙り込んでしまった。

要するに、私の不安は、あなたに嫌われてしまったのではないかと  
いうことだった。

あるいは、そもそもあなたは私のことを好きなのか、そのことに  
確信が持てないということだった。

好きでもない女をあんな店に連れて行くだろうか？

好きでもない女の身体をあんなに丁寧に舐めるだろうか？

第一、あなたは私の上司なのだ。

今夜のことが遊びなら、セクハラで訴えられても文句は言えない。  
そんな危険をおかすだろうか？

それに、あなたははつきり私を好きだと言ってくれた。

そんな風に考えていくと、あなたは私をかなり真剣に好きなのだ  
という結論になるのだけれど、私を裸にした時のあなたの顔を思い  
出すと、また分からなくなった。

暑気払いの時も、今日お酒を飲んでいた時も、あなたは私の脚が  
細いことやお尻が小さいことをほめてくれた。

「キューティ・ハニーみたいだよ」

あなたは、賞賛すべきものは賞賛する人だ。

そのあなたが何も言ってくれないということは、服を脱いだ私の  
身体が期待していたのと違ったということなの？

「おっぱいもキューティ・ハニーみたいだね」と言ってくれると  
思っていたのに。

どこが気に入らなかったの？

でも、それは思い過ごしかもしれない。

いつか何か言ってくれるのかもしれない。

それに、仮に私の身体があなたの好みと違っていたとしても、それだけで私を嫌いになりはしないだろう。

同じように、私の言動にちょっと気に入らないことがあったとしても、それだけで私を嫌いになりはしないだろう。

うん、大丈夫。

いつまで考えていても答えが見つかるわけじゃない。

よいことだけを思い出して、今夜はぐっすりと眠ろう。

その時、携帯が震えた。

やっと来た！

私はいそいそとバッグから携帯を取り出した。

あなたからのメールだった。

こちらこそありがとう。またね。

私は、その1行のメールを何十秒も馬鹿みたいにジッと見ていた。何これ？

それだけ？

私のメールは、今夜の感想を絵文字満載で書いた30行くらいのものだった。

その返事がたった1行。

私はすぐに抗議のメールを打ち始めたけれど、結局送らなかつた。これ以上、不安の種が大きくなるのが恐ろしかった。

駅を降りると、また満月が見えた。

暗い夜空に静かに輝く月は、なぜかあなたを連想させた。

私は、月に向かってつぶやいた。

「ねえ、私のこと好き？」

翌日は土曜日だった。

当然、その次の日は日曜日だった。

私は、この二日間ほど土日の時間を長く感じたことはなかった。早くあなたに会いたかった。

会いたくて、会いたくて、仕方がなかった。

何をしても、どこにいても、昨夜の様々な出来事が次々とよみがえってきた。

夫と会話していても、途中であなたのことを考えてしまい、何を話していたのか分からなくなった。

身体のいろんな部分に、あなたの柔らかかな唇と舌の感触が残っていた。

膣と子宮には、堅いペニスの感覚が残っていた。

私は朝から晩までずっと濡れていて、下着を何度か取り替えたほどだった。

私は、昨夜のデートを企画・演出したあなたに惚れてしまった。

今までもあなたにあこがれのような気持ちを抱いていたけれど、今は崇拜しているのだった。

私は、恋に落ちたことを自覚した。

その一方で、昨夜の1行メールを思い出すと、冷や水を浴びせられたような気分になった。

寂しさと不安で胸が苦しくなった。

そこにはわずかだが怒りの感情も混じっていた。

こちらこそありがとう。またね。

変なことが書かれていたわけではない。

ごく普通のまともなメールだ。

でも、私は気に入らなかった。

たった15文字。

しかも全部ひらがな。

「あなたは小学生か！」

と突っ込みを入れたかった。

メールを打つ時間がなかったのかもしれない。

でも、それにしても、あまりに素っ気ない。

あと一言か二言、書けなかったのか。

それが無理なら、せめて絵文字の一つも入れてほしかった。

このことは、今度会ったら必ず言おう、と思った。

私には、もっと重大な、今、真剣に考えなければならぬ問題があった。

これからどうするのか。

あなたとつきあうのか。

つきあうとしたら、どういう形でつきあうのか。

夫と離婚するのか。

あなたと結婚するのか。

自分一人で決められることではないけれど、自分がどうしたいのかは、はっきりさせておかなくちゃ、と思った。

私は、どうしたいのだろうか？

私と夫は仲が良かった。

私は毎朝、夫を車で駅まで送り、帰りも毎晩、迎えに行った。

休日はいつとも一緒に買物や食事に出かけ、時々二人でゴルフにも行った。

子供がないから、新婚の時とあまり変わらない生活だった。

ただ一つ変わったのは、性生活だった。

3日に1度が1週間に1度になり、1月に1度になり、3か月に1度になった。

「ねえ、ずいぶんご無沙汰なんじゃない？」

と言うと、

「なんか順子とはそういうことしなくてもいい感じがするんだよね」とわけのわからない答えが返ってきた。

そして、3回目の結婚記念日を最後に、まったくセックスをしなくなつた。

セックスレス夫婦が多いとは聞くけれど、ちょっと早いんじゃないかな、とは思つた。

でも、あまり気にならなかつた。

もともと、セックスは、私にとって微妙な行為だった。

気持ちよかつたし、好きだったけれど、いかなかつたから、性欲を満たす行為ではなかつた。

夫から求められなくなつたことは、寂しかったし、プライドが傷ついたらけれど、欲求不満になることはなかつた。

なければないで、別にかまわなかつた。

でも、あなたとのセックスを経験した今は、すっかり事情が変わ

ってしまった。

今すぐにでも、あなたとセックスしたかった。

あの経験を一夜限りのことにするのは、とても無理のように思えた。

けれど、不倫とか愛人とかいうのは嫌だった。

ということは、つまり、私はあなたと結婚したいのだった。

あなたと一緒に生活して、毎晩セックスすること。

それが私のしたいことだった。

もちろん、人生がそんなにシンプルに片付かないことは分かっていたのよ。

私は別に夫を嫌いになつたわけではなかった。

夫は中学の同級生で、恋人になつたのは25歳の時だけど、友達の期間を含めれば、もう20年のつきあいになる。

夫のどこが好きなのか、なぜ結婚したのかと聞かれると、うまく答えられない。

夫は100キロを超える巨漢で、一般受けする外見じゃないし、私も別にそういう体型が好みというわけじゃない。

けれども、明るい性格で友達が多くて、私に優しくかった。そして、なんとなく気が合った。

そういう夫を捨てて、1度デートしただけのあなたを手に入れようとするのは、人間のすることじゃないと思った。

私はまだあなたのことをほとんど何も知らない。

あなたもまだ私のことをほとんど何も知らない。

結論を出すには、もう少し時間が必要だ。

結論が分かっていたとしても、時間が必要なことがある。高い服を買う時と同じよね。

夫にも、職場の人たちにも、友達にも、隠し事をすることになるのがつらかったけれど、仕方がないと思った。

形は不倫だけど真剣な恋愛。

人生が1度しかない以上、それはやむを得ない選択だと思った。

こうして、土日の二日間で、私の覚悟は、ほぼ固まった。  
後は、あなたの気持ちを確認するだけだった。

月曜日の朝、オフィスに入る時は、後ろめたさと緊張で、ドキドキした。

「おはようございます」の一言も声が震えた。

あなたは何事もなかったような顔をして、クールに仕事をしていった。

金曜の夜とのギャップが大きすぎて、私は思わずニヤニヤしてしまった。

「どうしたの？」

隣の佐藤さんに声をかけられて、ドキリとした。

「別に、何でも……」

「あれ、メイク変えた？」

「ええ、今日はちょっと」

「副課長と何かあったの？」

「え？　なんでですか?!」

「冗談よ。何慌ててるの？　やだ。怪しいー」

佐藤さんは本当に鋭くて、しばらく前から私があなたを好きなんじゃないかと疑っていて、時々からかわれていたの。

オフィスですれ違う時に、あなたはわざと、ほんの少しだけ私の身体に触ったでしょ？

その一瞬のわずかな接触が、私を興奮させた。

朝から夕方まで、好きな人と一緒にいられる。

オフィスラヴってというのは、こりゃ確かに楽しい、と思った。

今までの職場は何とまあ味気なかったことだろう。

私は、あなたと話したいことがたくさんあつたし、あなたとキスがしたかったし、あなたとセックスがしたかった。

でも、あなたはたいてい残業していたし、私も普段は夫を駅まで迎えに行かなければならなかったから、今日会いたいと誘うことができなかった。

それで、帰りの電車の中で、「お疲れ様です。今日は緊張しました。でも、なんか一日楽しかったです。ノー残業デーの水曜日に少し会えますか？」というようなメールを送った。

すると、すぐに返事が返ってきて、「うん」と書いてあった。

今度は、たった二文字。

水曜日に、必ず糾弾しよう、と私は思った。

水曜日、あなたは車で出勤して、夕方、私たちは車の中でデートした。

車の中でコーヒーを飲み、セックスをした。

いい年をした大人がこんなことをするなんて、と思ったけれど、あなたと一緒にいると、なぜかそれが自然な行為のように感じられた。

それに、後部座席であなたに股がると、ペニスが子宮の入り口に絶妙な角度で当たって堪らなく気持ちよく、私はまたあっけなくいつてしまった。

セックスの後、私はいくつかの質問をし、あなたはそれに答えてくれた。

答えになっていない答えがほとんどだったような気がするけれど。

「ねえ、これからどうするつもりなんですか？」

「どうするつもりって？」

「私、愛人みたいなことになるのは嫌だから」

「結婚したいっていうこと？」

「あなたがどういう気持ちか聞いているの」

「真剣に好きだよ」

「で？」

「つきあいたい」

「不倫ということ？」

「定義する必要はないんじゃない？」

「でも、不倫でしょ？」

「まあ、そうだね」

「結婚するつもりはないのね？」

「そういうことを考えるのは、もう少し先のことだよ」  
あなたの答えは私の考えとほとんど同じだったのに、なぜか、私はひどく寂しい気持ちでした。

「隠したり隠れたりするのって、嫌いなんです」

「僕もだよ」

「でも、隠したり隠れたりしなくちゃならないでしょう?」

「そうだね」

「いろんなところへ一緒に行きたいのに」

「僕もだよ」

「でも、行けないんでしょう?」

「たぶんね」

「玉家みたいなお店だったら、いいんじゃない?」

「現地集合ならね」

「また、行きましようよ、今度は割り勘で」

「そうだね」

でも、結局、その約束は果たされなかった。

あなたにしてみれば、約束した覚えはないということかもしれな  
いけれど。

今回、やっと誘ってくれたわけだけど、ちょっと遅かったわね。

私には、聞きたいことがいくつもあった。でも、聞けることと聞けないことがあった。私の裸をどう思ったかということとは、聞けないことだった。メールのことは、微妙だったけれど、ぜひとも確認しておかなければ、と思った。

「この間のメール、ちょっとひどくないですか？」

「この間って？」

「玉家に行った夜、帰りに私がメールしたでしょう？ その返事」

「何がひどかった？」

「たった1行ってというのは、なくないですか？ 私、かなり長いメール送ったんだけど」

あなたは、溜息をついた。

「僕は何て書いて送った？」

「こちらこそ、ありがとう、またねって」

「十分愛情のこもった内容だと思うけど」

「私は、ひどく素っ気ないメールだと思ったの」

「返事が来ただけでも幸せじゃないか」

「もう少し言葉を足してもらえるだけでよかったのよ。絵文字とか入れて」

「君は間違っているよ。ブツダの教えを読んだ方がいい」

「何それ？ どういうこと？」

「欠乏感というものは、がん細胞のように、増殖し、転移するんだ。きりが無い。相手に何かしてほしいなんて、望んではいけないんだよ」

「ふーん。お釈迦様が言ってるなら、そうなのかもね」

私は笑顔で退散したけれど、納得できなかったし、「返事が来た

だけでも幸せじゃないか」というセリフにプライドを傷つけられていた。

何様？ と言いたかった。

でも、あなたは、私以上に怒っているみたいだった。

「メールなんて、僕らが若い頃にはなかったじゃないか。ないと思えばいいんだよ」

「だって、現にあるんだもん」

「事務連絡の道具としてだけ使った方がいい。心の交流は、会ってすべきだよ」

結局、それから私たちはギクシャクした感じになって、車が駅に着くまで、あまり話をしなかった。

「ありがとう。またね」

私は、精液入りコンドームとテッシュペーパーの入った紙袋を持って、車を降りた。

「うん。またね」

あなたは微笑みながら、そう言うてくれた。

メールのことをどう考えたらよいのか、私にはよく分からなかった。

ささいなことのようにも思えたし、決定的なことのようにも思えた。

確かなことは、意見の一致しない事柄が少なくとも一つあるということだった。

私は、駅のホームのゴミ箱に、持っていた紙袋を投げ捨てた。

それから、私たちは、毎週水曜日の夕方6時から8時まで、あなたの車の中で会った。

そういうデートの仕方は、最初のデートとのギャップが大きかったけれど、お互いの状況を考えると仕様がなかったし、「密会」という感じがして悪くなかった。

それに、あなたは、ある意味、いろんな場所へ連れて行ってくれたのだった。

あなたは街の死角をたくさん知っていて、いろんな場所に車を止めた。

正直、「こんなところで？」と思うような場所も多かったけれど、不思議と誰も来なかった。

メールに関して、私は同じ過ちを何度か繰り返した。

長いメールを送り、短い返事を見てがっかりした。

返事が来ないこともあった。

私はあなたに苦情を言い、逆に叱られた。

しばらくはメールを書かないようにするのだけれど、しばらくすると、つい長いメールを書いてしまい、似たようなやり取りが行われた。

このことについては、結婚して一緒に生活すれば、解決する問題のように思われた。

普段会えないから、いろいろとメールを書きたくなるのであって、結婚すれば、そもそもそんなメールは送らないだろう、と思った。

でも、メールの問題は、もっと根本的な問題をはらんでいた。つまり、あなたは私を愛していないのではないか、あるいは、あ

あなたはひどく冷たい人間なのではないか、という疑いだった。

メールの件だけでなく、あなたと一緒にいても、そういう疑問を抱くことが時々あった。

あなたがボソツと何かを言っつて、私がそれを聞き取れなかったり、意味をすぐに理解できなかったりして、「え？」と聞き返すと、あなたは口をつぐんでそれきりにしてしまうことがあった。

それから、私が職場の人間関係ネタを話したりすると、ほとんど何のリアクションもしてくれないことがあった。

そういう時、私はひどく寂しい気持ちになり、あなたは私を少しも愛していないのではないかと疑った。

あるいは、もともと酷薄な男なのかもしれないと考えた。

けれども、後部座席に移ると、あなたは別の人になった。すべてが優しく、すべてが暖かかった。

あの狭い空間の中で、心も身体も、私が期待する以上に満足させてくれた。

あなたの身体を覆っている目に見えない何かはがれて、生のあなたが姿を現すような感じがした。

どちらのあなたが本当のあなたなのか。

私は、時々冷たく見える運転席のあなたは、何かの理由でそう振る舞っているだけで、後部座席のあなたこそ本当のあなたなのだ、と思った。

それは、公と私、外と内、オンとオフみたいなもので、一緒に暮らせば、家の中では、あなたはいつも優しく暖かいのではないかと考えた。

きつと、そう信じたかったのね。

あなたとつきあい始めてから、私は、夫との結婚生活に大きな疑問を持つようになった。

何となく受け入れてしまっていたけれども、この年齢でセックスレスというのはありえない、と思った。

ほかのすべてがうまく行っているとしても、セックスのない結婚生活に一体どれほどの価値があるのだろうか。

夫が中学以来の大事な友達だとしても、結婚生活を続ける理由にはならない。

離婚して友達に戻ればいいだけの話だった。

私は、セックスで彩られたあなたとの結婚生活を夢見た。

きっとあなたは、家の中のいろんな場所で、毎回違うやり方で、たっぷりと私を愛してくれるだろう。

そんな人生が送れるなら、あなたに少しくらい薄情なところがあったってもかまわない、とも思った。

少しくらいならね。

もう1万字も書いたのね。

あなたには退屈だったろうけど、私は自分がどんな気持ちであったとつきあっていたかを伝えておきたかったの。

もっと書きたいことはあるけれど、いい加減にして、そろそろ肝心な話をしないとね。

ああ、でも、これからそれを書くのだと思うと、怖じ気づいてしまふ。

こんな風に今までのことを思い返していると、あなたへの熱い気持ちがよくえってくる。

正直、また抱かれない、と思う。

その淫らな執着心を断ち切るために、これを書き始めたのに、永遠にあなたに抱かれることがなくなるのだと思うと、恐ろしくなる。あなたを失うのも怖いし、セックスを失うのも怖い。

もしかしたら、私は、これから死ぬまで誰ともセックスしないかもしれないのだ。

そして、その確率はかなり高い。

あなたと出会う前も同じ状況だった、と考えようとするのだけれど、決して同じではなかった。

それなら、あなたとセックスフレンドになればいいじゃないか。

私は、それを何度も考えた。

そういう風に割り切れれば、何の問題もないじゃないか。でも、ダメなの。

実際、試してみたのだけれど、ダメなのよ。

何がダメって……  
それはまた後で書くわ。

とにかく、そんな風にして半年が過ぎた。

その間、レストランに行ったのは、たった1度。

12月の私の誕生日にラ・ヴォワールに連れて行ってくれた時だけ。

それ以外は基本的に、車中2時間デートだったわよね。

つまり、デートらしいデートは全然しなかったわけだけど、私  
は不満も疑問も抱かなかった。

あの日までは。

4月の最後の金曜日だった。

その日は、佐藤さんたちとロイヤルホテル1階のアリエッタで女子会だった。

9時半頃にお開きとなり、店を出た時、目の前をあなたが歩いていった。

女の子と一緒にだった。

横顔がちらりと見えただけだったけれど、若くてきれいな子だった。

あなたは私たちに気づかず、佐藤さんたちもあなたに気づかなかった。

私だけが気づいたのだった。

私たちは駅寄りの出口に向かって歩いていき、あなたたちはフロントの方に向かって歩いていった。

心臓が異常なほどドキドキしていた。

ホテルの出口まで来た時、

「ごめん、私、ちょっとお手洗いにいきたいから、ここで失礼するわ」

そう言って、私は皆と別れた。

変に思われたかもしれないけれど、とっさにそうしてしまった。いてもたってもいられなかった。

ロビーを引き返していくと、あなたと女の子の後ろ姿が見えた。

あなたたちはフロントの前を通り過ぎて、エレベーターホールへ入っていった。

私は遠くからあなたたちがエレベーターに乗るのを確認し、それからそのエレベーターの前まで走った。

私はランプを見上げた。

エレベーターは一気に最上階まで上っていったようだった。  
最上階にはバーがある。

私は、しばらくそこで呆然としていた。

これから何をしたらいいのか、分からなかった。

突然、猛烈な吐き気が襲ってきた。

私はトイレに駆け込み、ギリギリのところまで便器に吐いた。

胃の収縮が何度もやってきて、何度も大量に吐いた。

生ハムも、パルメザンチーズのリゾットも、カプレーセも、ルッコラも、ペペロンチーノも、白ワインも、赤ワインも、ティラミスも、何もかもが吐き出されてしまった。

やがて胃が空っぽになったみたいで、黄色い液体が出た。

私は涙と鼻水を流しながら、ちよつと前まで私の胃の中にあったもの、もつと前は美しくおいしい料理だったものを見つめていた。

私は吐瀉物を流し、便器に腰掛けた。

ティッシュで涙を拭き、鼻をかんだ。

吐くなんて久しぶりだ。

こんなに徹底的に吐くのは、生まれて初めてかもしれない。

飲み過ぎたのかもしれないし、食べ過ぎたのかもしれない。

さつき走ったのがいけなかったのかもしれない。

でも、たぶん、違う。

あまりのシヨックに吐いたのだ。

私の脳裏には、アリエッタの前で見たあなたの顔が焼き付いていた。

あなたは、私が今までに見たことのない表情で、女の子に話しかけていた。

どう言ったらいいのだろう？

一瞬のことだったけれど、一言でいえば、あなたは限りなく優しく見えた。

そして、女の子も、とても楽しそうに微笑んでいた。

そのツーショットは、何だか芸能人のカップルみたいなおーラに包まれていた。

あれは誰だろう？

何だかひどく若かった。

たぶん二十代前半だろう。

しかも、ハンパじゃなくきれいな顔をしていた。

堀北真希みたいだった。

そういう女の子が、よくなつた猫みたいに、あなたに寄り添って歩いていた。

私には、そう見えた。

わけが分からなかった。

私は、ロビーで待ち伏せて、偶然を装って声をかけようか、あるいは、後をつけようか、と考えた。

でも、もしかしたら、部屋を取ってあって、もうロビーには降りてこないかもしれない。

それなら、バーへ行って声をかけようか。

そんなことをしたら、後で佐藤さんたちにバレた時、ひどく奇妙な行動と思われてしまう。

さんざん悩んだあげく、私はおとなしく帰ることにした。

私は、手洗い場の鏡で化粧を直した。

鏡には33歳の私が映っていた。

化粧をすればまあまあ美人だ。

でも、あの堀北真希は、たぶんほとんど化粧をしていない。

私は駅までトボトボ歩き、電車に乗った。

今日分かったことは、あなたには若くてきれいな女の知り合いがいて、今、ホテルのバーと一緒に飲んでいる、ということ。

彼女があなたの何なのかは、分からない。

だから、まだ、怒ったり悲しんだりするのは早かった。  
でも、私は、ひどくみじめな気持ちだった。

翌日は二日酔いで、一日中、頭が痛く、胃が重かった。私は、ほとんどの時間をベッドの中で過ごし、これからどうするかを考えていた。

私には、まず、二つの選択肢があった。

昨夜見たことをあなたに告げ、問いただすかどうか。

問いたださないということは、昨日のことは忘れるということだ。

問いただして、あなたがちゃんと答えてくれなかった時は、どうしよう？

それだけで別れるというのも、おかしい気がする。

別れないのなら、やはり昨日のことは忘れたほうがいい。

あなたは本当のことを言ってくれるだろうか？

本当のことは何なのだろうか？

冷静に考えてみると、あなたとあの子が恋人同士だというのは考えにくいことだ。

まともな女の子なら、20歳も年上の妻子持ちとつきあったりしないだろう。

そして、彼女は、とてもまともに見えた。

知的で無垢な感じがあった。

じゃあ、彼女は何なのか？

キャバ嬢？

そうかもしれない。

知的で無垢なキャバ嬢だって、いるのかもしれない。

もしキャバ嬢だったら、私は許せるか？

キャバクラに行くのは、まあ許すしかない。

同伴は？

同伴は大きな裏切り行為だと思うけれど、食事をしたり飲んだり  
しただけなら、不承不承、許すことになるだろう。

でも、キャバクラのシステムはよく知らないけど、9時半から同  
伴というのは、ちょっとおかしいんじゃないか。

やっぱり、知的で無垢なキャバ嬢なんて、いないような気がする。

そうすると、彼女は取引先か何かの女子社員で、食事をした後、  
バーに行った、ということか。

それは許せるのか？

たいしたことではないようにも思えるけれど、あなたが彼女を口  
説こうとして二人きりの食事に誘ったのだとしたら、大問題だった。  
もしもあなたが私を愛しているのなら、もう二度としないと約束  
させることで、許してあげてもよかった。

というか、そうしたかった。

私は、あなたと別れなくなかった。

世間はゴールデンウィークとなり、私も連休の谷間に休暇をとったから、しばらくあなたに会えなくなつた。

あなたに会えないのは寂しかったけれど、反面、ほつとした気持ちもあつた。

あなたに対してどうという態度を取るべきか考えがまとまらなかつたから。

あなたを問いつめてすべてをはつきりさせたいという気持ちと、その結果への恐怖の間で、心がゆれていた。

休暇をとつたといつても、旅行に行つたわけではなく、家の掃除をしたり、近くで買物をしたりしていた。

ゴールデンウィークの後半になると、することがなくなつた。

私は葉子にメールをして、彼女のマンションに遊びにいった。

葉子というのは、前に話したことのある高校時代の親友。

葉子は、デブで鬱病で失業中で未婚で恋人もいない。

そんな彼女と一緒にいると、自分がなんて恵まれているんだろうと思つた。

あなたを失つたとしても、心身ともに健康だし、仕事はあるし、優しい夫がいる。

刺激はないけれど、ますます幸福な人生だ。

相思相愛の相手がいて、その人とセックスできるということは、女にとって最上の喜びかもしれない。

けれど、それが人生のすべてというわけでもない。

その当たり前のことに気づき、私は重苦しい気分から少し解放

された。

多少投げやりな気持ちもあったけれど、最悪の事態を受け入れる心の準備ができたような気がした。

今度あなたに会った時どうするかということも、成り行きでいいや、と思うようになった。

少し様子を見てもいい。

自然体で行こう。

水曜日、私が車に乗り込むと、あなたは「久しぶり」と微笑んで私の手を握ってくれた。

それだけのことで私は嬉しくなり、胸の奥にあったモヤモヤが消えてしまった。

その日の昼間は、「やっぱり、ちゃんとこの間のことを聞いてみよう。彼女が誰なのか、どういう関係なのか、はっきりするまで、キスも拒否しよう」と思っていたのに、結局、私はあなたに何も聞けなかった。

私はいつものようにあなたに抱かれた。

2週間ぶりのせいか、いつもの2倍感じるような気がした。

普段は手なんか握ってくれないのに、なぜあの時は握ってくれたのかしら？

その時は、直感的に「愛されている」と感じて、ただ嬉しかったのだけれど、冷静に考えてみると、あなたも2週間分の性欲がたまっていた、自然と優しく振る舞ったのかしら？

そんな風に考えるのは寂しいわね。

とにかく、私は、ロイヤルホテルで目撃したことをうやむやにしないで、何事もなかったかのようにあなたとの交際を続けた。

時間が経てば経つほど、言い出しにくくなった。

ただ、私は、車中2時間デートに不満と疑問を抱くようになった。

あなたと堀北真希が特別な関係でないとしても、少なくともあの夜、あなたはホテルのバーで彼女にごちそうしたはずだ。

ほかの女のためにお金を使い、私のためにお金を使ってくれない

ことが腹立たしかった。

あなたは毎日残業かと思っていたけれど、時間を作ろうと思えば作れるのだ。

私だって、基本的には早く帰宅しなければならぬけれど、たまに遅くなることはできる。

私もお洒落なバーとかレストランに連れて行ってほしいと思った。

それに、だんだん日が長くなり、6月になると、7時になっても車の外が暗くならなかった。

セックスの時間が短くなり、ひどく慌ただしい感じになった。

私は、ホテルでゆっくりして、伸び伸びとセックスしたかった。

お風呂で汗を流して、お互いの身体を舐め合いたかった。

部屋の中で一緒に過ごすという、疑似結婚生活を体験したかった。

6月の半ばに、私たちはこんな会話をした。

「ねえ、もう車の中でするのは無理なんじゃない？」

「僕はもっと遅くなってもかまわないんだけど」

「だったら、ホテルに行きましょうよ」

「いいよ」

「あと、たまにはどこかで美味しいもの食べたいな」

「いいね」

「じゃ、あさつての金曜日とか、どう？」

「水曜以外は、確約するのが難しいな」

「でも、金曜日に飲み会すること、けっこうあるんでしょ？」

「あるけど、かなり遅れて参加したりしているからね」

「玉家の時は大丈夫だったじゃない」

「今は仕事を立て込んでるから」

「じゃ、来週の水曜日ならいい？」

「食事に行くっていうこと？」

「食事でもいいし、ホテルでもいいし、両方でもいい」

「分かった。ただ、密会用のレストランを探すのって結構大変なん

だよ。君も探してみて」

「うん」

私は、案外あっさり希望が叶って、拍子抜けした。

もっと早く言えばよかった、と悔やんだ。

そして、何となく、嬉しさが中途半端だった。

頭の片隅に引っかかるものがあった。

女の勘、というやつだった。

もしかしたら、あなたは金曜日、堀北真希と会う約束をしている

んじゃないか？

あなたを疑う気持ちはだんだんと大きくなり、金曜日には確信に  
近い不安になっていた。

金曜日、仕事が終わると、私は会社の向かいのスタバに入り、2階の窓際のカウンターに座った。

コンタクトをとってメガネをかけ、大きめのマスクをした。

我ながら怪しい人物だった。

会社の人に声をかけられたらどうしよう、とビクビクしていた。

よく考えて行動したわけじゃない。

何かしなければいけない気持ちだった。

もちろん張込みのノウハウも尾行のノウハウも知らなかったけれど、あなたが出てきたら、とりあえず後をつけて、誰と会い、どこへ行くのか見届けようと思っていた。

7時まで待つてあなたが出てこなければ、帰るつもりだった。

6時50分に、あなたは現れた。

私は、あわてて席を立ち、階段を駆け降りた。

店を出ると、30mくらい先にあなたの姿が見えた。

私は、道路の反対側を歩いて尾行した。

途中であなたは左に曲がった。

その道の先にはロイヤルホテルがある。

私は、既に泣きそうだった。

あなたは、案の定、ロイヤルホテルに入っていた。

私は一瞬どうしようかと迷ったけれど、「ああ、もう、なるようになれ！」とあなたの後を追ってホテルのエントランスに入った。

あなたは、フロント前のソファに座っていた。

私はあなたの後ろに回り込み、大きな柱の陰に立った。

あなたとの距離は10mくらいだった。

心臓がバクバクしていた。

これから自分が目にするのは、だいたい想像がつく。

あなたはロビーで堀北真希と待ち合わせて、一緒にこのホテルのどこかのレストランに行くのだろう。

それを見てしまったら、もう終わりだと思った。

レストランに乗り込んで、グラスの水をあなたにかけてやろう。

安っぽいドラマのベタなシーンを演じてやろう。

涙がじんわりとあふれてきて、私はバッグからハンカチを取り出した。

泣いちゃダメだ。

ちゃんと見なくちゃ。

けれども、私がそのあと見た光景は、想像していたものとは少し違っていた。

背後でカッカツというヒールの音が聞こえて、私は振り返った。モデルみたいな女の子が近づいてきて、私のすぐそばで立ち止まった。

超ミニの黒いワンピースから恐ろしく長い脚がすらりと伸びている。

もともと背が高いところに10センチくらいのピンヒールサンダルを履いていた。

身長165センチの私が見上げるような位置に小さな顔があった。肌が白い陶器のように美しい。

「少女時代」の誰かに似ていた。

彼女はバッグから携帯を取り出し、ボタンを押して耳に当てた。

「あ、今着きました。どこですか？ ……わかりました！」

そう言っただけで彼女はパタンと携帯を閉じ、再びカッカツと歩き出した。

ハツとしてあなたの方を見ると、あなたがソファアから立ち上がるところだった。

彼女はあなたに駆け寄り、勢い余ってあなたの胸にぶつかったように見えた。

二人は二言、三言、言葉を交わしてから歩き出し、エントランスを出てタクシーに乗った。

あの時、ドラマみたいに、私もすぐに後ろのタクシーに乗って、「あの車を追って」とか言っただけで尾行すれば、その後余計なお金を使わずにすんだかもしれない。

けれど、私は、あっけにとられて立ち尽くしてしまった。

今のは何？  
あれは誰？

堀北真希が来ると思っていたら、少女時代が来た。  
堀北真希よりさらに若い。

20歳前後だろう。

あれは取引先の社員という雰囲気じゃない。  
むしろキャバ嬢っぽい。

時間的にも同伴が十分あり得る。

でも、なんか違う気がした。

ファッションのセンスが普通じゃなかった。

雑誌から抜け出てきたように洗練されていた。  
本物のモデルなんじゃないか、と私は思った。

あまりのことに涙がすっかり引っ込んでいた。

翌日の土曜日、私は、朝刊に折り込まれていた探偵事務所の広告をにらんでいた。

「ガラス張りの低料金プラン」、「秘密厳守」、「相談見積もり無料」などと書いてあった。

チラシの表と裏を隅から隅まで読み、考え込んだ。

つきあい始めた頃、あなたは私を真剣に好きだと言ってくれた。今はその言葉を疑うのが当然だった。

こういう時、普通はどのような行動をとるのだろうか？

あるいは、どのような行動をとるべきなのだろうか？

新聞の「悩み相談」にでも投稿してみようか、と真剣に思った。

もちろん、あなたに私が見たことを話して、どういふことなのかストレートに聞くことも考えた。

ただ、それで真実が明らかになるといふ保証はない。

むしろ適当にごまかされてしまう可能性の方が高い。

だまされてつきあい続けるのは嫌だった。

逆に、あなたの答えが本当のことであっても、それを信じられないような気がした。

とすれば、いずれにしても、あなたを詰問するのは意味がないように思われた。

それなら、いっそのこと、探偵を雇って、調査するのがいいんじゃないか。

昨日のように、自分でも張込みや尾行はできるかもしれない。

あなたたちがホテルに行くかどうかを確認することもできるかも

しれない。

でも、堀北真希や少女時代が何者なのかまで調べるのは、素人には無理だろう。

そこまでする必要はないかもしれない。

でも、私は知りたかった。

あの美少女たちが一体誰なのか。

それを知ることのないままこの恋を終わらせることはできない、  
と思った。

夫はゴルフで不在だった。

私はチラシの探偵事務所に電話をかけ、午後に無料相談の予約を取った。

自分がひどく馬鹿げたことをしようとしていることは自覚していた。

不倫相手の浮気調査なんて、正気の沙汰じゃない。

特別な事情で上司の素行調査をしたい、というようなことにしようかとも考えた。

でも、本当の目的を伝え、必要な情報をすべて提供しなければ、効率的な調査はできないだろう。

それに、私は、とにかく誰かに話を聞いてもらいたかった。

1年近く抱えてきた秘密を誰かに洗いざらい話してしまいたいという気持ちがあったのだ。

対応してくれた調査員は、私より少し年上の感じのよい女性で、伊東と名乗った。

私は、意を決して、自分は結婚しているのだが恋人がいて、その人の素行調査をお願いしたいのだと言い、

「身勝手で恥ずかしいのですが」と付け加えた。

伊東さんは、

「その方のことをよほど真剣に愛しているらっしゃるのですね」と言い、心の底からいたわるように微笑んでくれた。

まったく予期せぬ優しい言葉、そして、核心をつく言葉だった。

「いろいろと思うところがあつて、できれば夫と離婚して、その人と結婚したいと思つてゐるんです。本当に身勝手に恥ずかしいのですが……」

「結婚していても、恋に落ちることはあります。人間というものは、そういう風にできているのです。その時、離婚して再婚するというのは、大変誠実な考え方です。身勝手などご自分を責めてはいけません。恥じる必要などありませんよ」

それを聞いて、私の中に鬱積していた様々な思いが涙となつて溢れ、静かに頬を伝つた。

この人は信頼できる、と私は思った。

私は、教会で懺悔するように、玉家から始まつたあなたとの物語を、涙も拭わず一気に話した。

私が話し終わると、伊東さんはしばらく私を見つめていた。優しくも厳しくもない微妙な表情で。

私は、その視線に耐えられなくなつて目をそらした。

やがて伊東さんが口を開いた。

「お客様のお気持ち、よく分かりました。ぜひ私どもにお任せいただきたく存じます」

調査費用は、2名体制1時間1万円が基本で、特別な経費がかかる場合はあらかじめ通知することだった。

「業界で最もリーズナブルかつフレキシブルな料金体系です」

と伊東さんは強調した。

「対象男性がほかの女性と肉体関係を持っているかどうかだけなら、うまく行けば3時間で事実を確認できます。3万円です。うまく行けばというのは、つまり、最初の調査日にホテルなどに行けば、という意味です。ただし、当然のことながら、必ずそうなるとは限りません。また、相手の女性の素性を突き止めるとなると、別途、最低でも3時間が必要となります」

「そうすると、普通だと10万円以上はかかるということになりませんか？」

「そうですね。少なくともそのくらいは見ていただく必要がございます」

「とりあえず10万円を上限にしてもらっていいですか？」

「けっこうでございます」

「調査結果を毎回すぐに報告してもらっていいですか？」

「2日後にはご報告いたします」

私は少し迷ってから言った。

「もし彼が女性と二人きりで会ったら、食事だけしてそのまま帰ったような場合でも、相手の女性の素性を調べてもらえますか？」  
「承知いたしました」

それから、私たちは調査日について話し合った。

最初の調査日は、次の金曜日と決めた。

探偵事務所ですべてを話し、調査を頼んでしまうと、私は何だか晴れ晴れとした気持ちになった。

変な話だけれど、後はプロに任せて、私はあなたを信じてみようと思った。

せっかく来週水曜日に食事の約束をしているのだ。  
楽しい時間を過ごせないのなら、会わない方がいい。

調査結果が出るまでしばらく会わないようにしようかとも考えた。  
でも、どうせ毎日会社で顔を合わせるのだ。

理由も告げずに会うのをやめたら、職場でも気まづくなってしま  
う。

それに、私は、あなたを疑えば疑うほど、あなたと会いたいのだ  
った。

何か少しでも私への愛情のしるしを見つけて安心したかった。

その日の夜、私はネットでレストランを探していた。

あなたが言ったとおり、確かに適当なレストランが見つからず、  
さんざん悩んだ。

私なりにいくつか候補を考え、あなたに相談のメールを打とうと  
思っていた時だった。

あなたからメールが来た。

私は心が躍った。

けれど、メールを開いて愕然とした。

7月1日付けで異動することになった。

水曜日はちょっと会えそうにない。

ごめんね。

もしかしたら、その衝撃は、堀北真希を見た時よりも、少女時代を見た時よりも、大きかったかもしれない。

私は、頭が真っ白になった。

分かりました。

一緒に仕事ができなくなることも、水曜日に食事ができないことも、残念だけど、仕方ないですね。

食事は、落ち着いたら、また誘ってね。

異動先はどこですか？

私は、震える指でメールを打ち、送信した。

しばらくしてから、得意の1行メールが来て、私も「ご栄転おめでとう」と1行で返信した。

何がそんなにショックだったのか、うまく言えない。

でも、私は、直感的にもうダメだと思ってしまったのだった。

その夜、私は眠れなかった。

翌日の日曜日は一日中身体がだるく、夕方、体温を測ったら39度を超えていた。

翌朝も熱は下がらず、私は会社を休んだ。

医者に行き、診察してもらうと、普通の風邪だと言われた。

食欲がなく、ほとんど何も食べられなかった。

解熱剤を飲んでも、あまり熱は下がらなかった。

ほとんどの時間をベッドの中で過ごし、眠ると悪夢を見て目が覚めた。

いつも同じ夢だった。

私はあなたとフレンチレストランで食事をしている。

白いテーブルクロスの上で、あなたは血の滴る牛肉を食べ、赤ワインをゴクゴクと飲み干す。

いつの間にかあなたは全裸になっていて、ありえないほどの堅さで勃起しているのが分かる。

気がつくとも私も全裸になっている。

あなたは不意に立ち上がり、私に近づいてくる。

私も立ち上がる。

ところが、そこで私は急に傍観者になる。

あなたと向かい合っているのは、あの少女時代の女の子だ。

あなたは彼女の裸をしげしげと眺め、

「完璧だ。キューティー・ハニーみたいだよ」

と満足そうに笑う。

それから、あなたはワインクーラーからボトルをとってグラスに注ぐ。

あなたは赤ワインを口に含み、彼女と唇を重ねる。

ワインがあなたの口から彼女の口に移り、彼女はごくりと飲み下す。

いつの間にか、彼女の顔は堀北真希似の女の子になっている。

彼女の唇の端から赤ワインが一筋滴り、白い肌を伝って乳房へ落ちていく。

それがピンクの小さな乳首に達した時、彼女はかすかにおののく。

いつもそこで目が覚めた。

結局、私は会社を3日間休んだ。

その間、あなたはメールも電話もくれなかった。

私は、寂しさとむなしさで、ずっと泣いていた。

目がはれて、ひどい顔になった。

孤独に耐えかねて、水曜日の朝、私は葉子にメールをした。

すると、葉子は昼前に家に来てくれて、お粥を作ってくれた。

「風邪がうつるよ」

「いいのよ、私は。どうせ失業中だから、いくらでも寝ていられるし」

今度は、葉子の優しさに涙があふれた。

葉子が鬱病になった時、私は彼女に何もしてあげなかった。

それどころか、葉子が仕事をやめた時、私は、やれやれ、と思っ  
た。

私の唯一の友達は、デブで未婚で恋人もいない。

おまけに鬱病になって失業してしまった。

私は葉子を情けなく思い、そんな友達しかいない自分もみじめに  
感じた。

ごめんね、葉子。

そして、ありがとう。

これからは、私もあなたのために何かするわ。

あなたが病気を治して就職できるように、私も力になる。  
ダイエットと恋人探しも手伝うよ。

私は、葉子の作ってくれたお粥を食べ、パジャマと下着を着替え

て、またベッドに入った。

この時は、嫌な夢を見ずにぐっすり眠れた。目を覚ますと6時少し前だった。

たくさん汗をかいていて、もう一度パジャマと下着を着替えた。熱を測ってみると、37度に下がっていた。

葉子はまだいてくれて、夕食のお粥を作っていた。

私は、それまで、あなたとこのことを葉子に一言も話していなかった。

不倫を告白できるほど気を許していなかったし、未婚で恋人もない葉子が聞いたら不愉快になると思っていたからだ。

でも、この日は、葉子が世界で最も信頼できる人間であるような気がして、葉子に甘えたかった。

私は、お粥を食べながら、何から何まで全部話した。

葉子は、話を聞き終わると、一言、

「何も探偵を雇わなくても、私に言ってくれれば」と言った。

私は吹き出した。

「やだ、葉子が何してくれるの？」

葉子は、まじめな顔をして言った。

「調査結果が出たら、教えてね」

翌6月30日木曜日、フラフラしながら出勤すると、佐藤さんがあなたの異動について教えてくれて、

「今日、送別会があるんだけど、出られる？」  
と言った。

私はその時どんな顔をしただろう？

私との食事は行けないのに、みんなとの宴会は行けるの？

昨日は無理だったのに今日は大丈夫なの？

そんな自己中心的な怒りがこみ上げてきて、聞き分けのない子供のように泣きわめきたくなった。

「まだ体調が悪いので……」

「あら、鈴木さんが一番名残惜しいでしょうに、残念ね！」

佐藤さんは、けたたましく笑った。

私は耐えられなくなって、トイレに逃げた。

同じ職場にいれば、毎日8時間も一緒にいることになる。

だからこそ、私は、週1回の車中2時間デートに不満を抱かなかつたのだと思う。

夫とは、睡眠時間を別にすれば、平日は4時間くらいしか一緒にいない。

上司と部下は、夫婦よりも近い。

でも、私たちは、明日から離ればなれになる。

午後になってあなたが机やロッカーの中を整理し始めると、私は胸が苦しくなってきた。

私はチラチラとあなたを盗み見た。

あなたは、心なしに微笑んでいるように見えた。

それがまた私の胸を締め付けた。

終業時刻になり、私はあなたに「お世話になりました」とあいさつした。

あなたは「こちらこそお世話になりました」と言った。

それで終わり。

あっけない幕切れだった。

金曜日は、けだるく、うつろな1日だった。

仕事をする気になれず、時間の流れが異常に遅かった。

その日、私は、淡いピンクのミニスカートスーツを着ていた。どうしてこんな服を着ているのだろうか？ と私は思った。

あなたとつきあうようになってから、私はネット通販であなたの好きな明るい色のスカートをたくさん買った。

以前は地味な色のパンツばかりはいていたから、佐藤さんに「最近お洒落になっちゃって、どうしたの？」とからかわれたけれど、気にせず買いまくった。

あなたのために買った服を、あなたのない職場で着る。不条理とはこういうことを言うのか、と思った。

新しい副課長は、外見的にあらゆる点であなたに劣っていた。背が低く、はげている上に、気持ちの悪い笑い方をした。ネクタイをはずしただけのクールビズが見苦しかった。

あなたに電話かメールを試してみようかとも、もちろん思った。

新しい職場はどうですか？

そんな風に連絡を試みるのは、ごく自然なことだ。けれど、それが怖くてできなかった。

どうしてここまで気持ちが塞ぐのか分からなかったけれど、すべてを消極的、否定的に考えるようになってしまっていた。

勤務時間が終わると同時に私はオフィスを後にした。

家に帰って、一人でコンビニ弁当を食べながら、今頃あなたは何をしているだろう、と考えた。

あなたの異動については、既に伊東さんに連絡してあった。今夜、決定的な事実を突き止めてくれるかもしれない。

早く楽になりたい、と私は思った。

もう限界に近い。

今の状態が続いたら、葉子みたいな病気になってしまう。

私には、それが確実なことのように思えた。

伊東さんから調査結果の報告を受けたのは、日曜日の午後だった。私は葉子と会う約束をして、夫には「葉子とお茶してくる」と言っ  
て出かけ、その1時間前に探偵事務所に行った。

伊東さんは、最初にプリントアウトした写真を2枚見せた。

あなたが髪の毛の長い女性と向かい合って酒を飲んでいる写真と、その女性の顔のアップ。

女性は若くない。

セクシーな感じの美人だが、かなりの年配に見える。

「ここはそば屋です」

「そば屋？」

「『やぶ』という老舗の有名なそば屋です。対象男性は一人でこのそば屋に入り、何分かすると、この女性が来ました」

「誰なんですか？」

「名前は岡田由起子。ここに書いてある住所に住んでいます。M商事に勤める夫と子供2人の4人家族です。子供は2人と男で、大学生と高校生です」

「大学生と高校生？」

「ええ。この女性の年齢は45歳です」

「あの人と同年？」

「はい。一般に、男と女がどこでどうやって知り合ったかを調べるのは、けっこう手間がかかります。この女性についても、裏を取ろうとすると、かなりの作業になりますが、この場合は、大まかな推理ができます。小中学校か高校、あるいは大学の同級生、あるいはその頃の仲間とか、そういう関係である可能性が極めて高いです」

それから、伊東さんは別の写真を見せた。

バーに入っていく写真とバーから出てくる写真だった。

「そば屋で2時間くらい飲んだ後、2人は『琥珀』というバーに行きました。ここも老舗の有名なバーです。そこに1時間ほどいて、帰りました」

「帰った？ ホテルには行かなかったのね？」

「ええ。ただ……」

伊東さんは、そう言って、パソコンの画面を見せた。

動画がスタートした。

あなたと女性が歩いているのを後ろから撮影していた。

人気のない道だった。

しばらくすると、女性があなたに何かを言い、2人は立ち止まった。

そして、キスをした。

私は、心臓が止まるかと思った。

「どう考えたらいいのでしょうか？」

私は、すぎるように伊東さんに聞いた。

伊東さんは一度目を伏せ、それから私の目を見た。

「難しいですね。」

とても短い、あいさつみたいなキスです。

しかも、女性の方から近づいていつているように見えます。

こういう時に拒否する男性は、ほとんどいません。

そして、その後、二人は駅で別れて、おとなしく帰っています。

この映像だけで、彼を糾弾しては気の毒かもしれませんが。

今回、分かったのは、同い年の女友達がいて、その女性は彼に好意を持っていてということだけです」

「でも……」

「ええ。二人は交際しているのかもしれませんが。」

あるいは、かつて交際していたのかもしれませんが。

あるいは、これから交際が始まるうとしているのかもしれませんが。

いろいろな可能性があります。

しかし、私の意見を言わせていただければ、彼らは白です。

私は、そば屋の隣のテーブルで観察し、耳をそばだてていました。

会話はとぎれとぎれにしか聞こえませんでした。どういうか、相当長い年月つきあってきた友達同士の雰囲気でした。

何か特別な信頼関係で結ばれているような感じがありました。

こんな言い方は極めて不穏当かもしれませんが、男と女の間でなかなか成立しない、うらやましい関係ではないかと思えます。

もしかしたら、遠い過去には恋愛関係にあったのかもしれませんが、現在はそうではないし、将来そうなることもないだろうというのが私の意見です」

「でも、それなら、なぜキスをしたのでしょうか？」  
「分かりません。欧米人のような感覚なのかもしれません」

そんなバカな、と私は思った。

「二人とも日本人じゃないですか」

伊東さんは、また目を伏せた。

「ちょっと余計なことを言いました。

分からないというのが正直なところです。

ただ、二人の関係がどんなものなのかは、十分な調査をしても、はつきりとは分からないかもしれません。

というより、鈴木様には理解できないかもしれません」

私はカチンと来た。

「どういう意味ですか？」

「すみません。また少し言い方を間違えてしまいました。

私も含めて、誰にも理解できないかもしれないという意味で申し上げたのです。

彼らは、恋人とか友達とかいう一般的なカテゴリーではくくれない間柄なのではないかと思うのです。

私どもとしては、鈴木様がご希望であれば、喜んでこの女性を調査します。

我々の報酬は調査時間に比例するわけですから。

しかし、限られたご予算の中では、調査対象を絞りませんと、何の成果も出せないという結果になる場合もあります。

私は、プロとして、そのような事態は避けたいのです」

私は、深呼吸をした。

そして、女性の顔が写った写真をもう一度よく見てみた。

若い頃は、さぞかしきれいだったろう。

45歳よりは若く見える。

でも、年齢というのは残酷なもので、彼女の肌からは何かが失わ

れてしまっている。

私にはかるうじて残っているものが、彼女にはもうない。

あなたがこんなオバサンを抱くだろうか？

抱かないとは言い切れないが、確かに、あなたがこの人と恋愛関係にあるという想像はしにくかった。

「伊東さんのご意見が正しいような気がしてきました。ただ、もし、私がああキスを許せないとしたら……」

「そうであれば、もう何も調査する必要はないと思います。お別れになるべきでしょう」

待ち合わせのスタバへ行くと、葉子はソファに座ってパソコンを開いていた。

「何してるの？」

「ちよつとね。それより、何か分かった？」

私は、探偵事務所で報告を受けた内容をそのまま話した。

調査員にストレートなもの言い方をされて、何となく腹が立ったことも言った。

「で、順子は彼を許せるの？」

私も、さつきからそれを考えていたのだった。

どんなキスであるかと、キスはキスだ。

あの映像は、私には衝撃的だった。

思い出すと、身体から力が抜け、気力が失せていくような感じがする。

でも、じゃあ、許せないのかと聞かれれば、許すしかないような気がする。

伊東さんにああいう風に言われると、確かに大したことではないようにも思えてくる。

「分からない。でも、まだ別れる気にはなれないわ。全然」

「そう」

葉子は、ずいぶんと元気そうだった。

顔色も良く、声にも張りがあった。

相変わらずデブだけれど、今日はどこかしら色気さえ感じられた。顔は悪くない、というより、むしろ美形なのだ。

世の中にはポチャ好きの男もいるらしいから、彼氏がいたっておかしくないはずなのに、私の知る限り、葉子は彼氏いない歴33年

だ。

そんなことを考えていた時、葉子が何か言った。

私はそれが聞き取れなかった。

いや、言葉はちゃんと聞こえたのだけれど、意味が分からなかったのだ。

「え？」

私が聞き返すと、葉子はゆっくりと言った。

「私が調べようか？」

「え？」

「やだな。耳、遠くなったの？ 私が、順子の大事な彼氏の、素行調査をしましょうか、って言ってるのよ」

それから葉子が何をしてくれたかは、ここには書かない。  
というより、私は知らないの。

「調べてほしいなら調べてあげる。ただし、どうやって調べたかは聞かないこと。それが条件」

葉子はそう言った。

私はその時はまだ葉子の言葉を真に受けてはいなかった。

葉子にそんな仕事ができるとは、とても思えなかった。

「あなた、病気なんでしょ？ 大丈夫なの？」

「うつ病は、会社を辞める頃には治っていたわ。もう抗うつ剤も飲んでない。睡眠剤は時々飲むけどね」

「じゃ、なんで会社やめちゃったの？」

「会社に戻れば、きっとまたおかしくなるのよ。嫌な奴らと一緒につまらないことやるんだから。けど、こういう調べものはたぶん私の天職なの」

「でも、探偵事務所に来週の金曜日も調査してもらうことになったのよ」

「それはそれで継続してもらっていいよ。何か分かるかもしれないから。でも、彼らに任せていたら、100万円つき込んで結論出ないんじゃないかな」

その3日後、水曜日の午後3時頃に、あなたからメールがあった。

今日、車で来ました。夕方、そっちに行く用事があるので、いつもみたいに会えるかな？

最後にあなたに抱かれたのは、2週間前だった。  
ずいぶんと昔のことのように思えた。

眠れない毎日が続いていた。

寂しさでおかしくなりそうだった。

心も身体もあなたを求めていた。

けれど、私の心はどこか屈折してしまっていた。

どうして、当日に誘うの？

しかも3時だなんて。

「そっちに行く用事があるので」というのも気に入らない。

異動の連絡をもらって以来、1通のメールもなく、ほったらかしにされていた。

せめて昨日メールしてくれれば、こんな風に感じなかったかもしれない。

あなたは今日の午後になってたまたまムラムラしてきて、それで私にメールしたんじゃないか。

それは私の被害妄想かもしれない。

これまで毎週水曜日にずっと会ってきたのだから、当日メールすればいいと考えたのかもしれない。

でも、例えそうだとしても、私は嫌だった。

1週間前に、私たちは食事をする約束をしていたのだ。

それがあなたの都合でキャンセルされたのだから、まずはそのデートを実現してほしい。

セックスはそれからだ。

だいたい、学生じゃあるまいし、なんでカーセックスなのよ！

ごめんなさい。今日は先約があるの。

私はそう打って送信ボタンを押した。  
送った直後に後悔したが、後の祭りだった。

あなたから返事は返ってこなかった。

翌日の夜、一人で食事をしていると、葉子から携帯にメールがあった。

「これを見て（PCに転送した方がいいと思う）」と書いてあり、その下にインターネットのURLがあった。

言われたとおりパソコンに転送してクリックすると、「平中のいい店やれぬ店」というブログが現れた。

何これ？

と私は首をかしげた。

ヒラナカ……？

けれど、次の瞬間、最新の記事が「琥珀」というタイトルであることに気づき、ハツとした。

その前の記事は、「やぶ」だった。

<琥珀> 7月1日（金）

幼なじみの女友達とそば屋で飲んだ後、もう一杯、ということでも9時ごろ訪問。

?? 僕は、1杯目はボウモア12年を水割りで、2杯目は勧められるがままにクラガンモア10年カスクストレングス（60度）をストレートで？

彼女が何を飲んだかは忘れたけれど、2人で2杯ずつ飲み、会計は13,000円。

お酒は美味しかったし、マスターやほかの店員さんたちも感じがよくて楽しかったけれど、うーん、なんか、ちよつと納得できないかも。

文豪が通った店というけれど、普通の人は通えないよなあ。

店を出て駅に向かうと、自然と公園沿いの静かな道を歩くことになる。

僕は久しぶりに彼女に唇を奪われてしまった。  
というわけで、????かな。

<やぶ> 7月1日(金)

幼なじみの女友達と訪問。

焼き海苔、いたわさ、厚揚げ、卵焼き、あいやきをつまみに、み  
ぞれ酒を飲み、せいろうで締めた。

すべて美味しかった。

けれど、これだけ飲み食いすると、2人で13000円。

結構な金額になる。

昔ながらの日本人のお酒の飲み方だと思っただけけれど、それが今  
では贅沢なものになっているということかな。

それと、酒を入れる升がちよっと不潔な感じで、残念。?

デート目的だと、致命的かも。

でも、炭火で焼く海苔など、大人の日本人の気分を少し味わえる。

?

そついうのに弱い女性となら、????かな。

「琥珀」の記事にはクラガンモアの写真が、「やぶ」の記事には焼  
き海苔の写真がついている。

焼き海苔の写真には、木箱のような器のふたを持つ手が写ってい  
た。

女の華奢な手だった。

動悸が激しくなった。

その前の記事は、「三木屋」だった。  
あじさいの花の写真がアップされている。

<三木屋> 6月24日(金)

モデル(の卵)と訪問。

20歳の女の子を感動させるには十分すぎる会席料理屋。

戦前の政治家の邸宅を改装した店内には、あじさいなど梅雨の季節にふさわしいしつらいが施されている。

庭にはかがり火が焚かれ、雰囲気十分。

料理は、それほど高価な食材が使われているわけではないが、大変美味しく、合格点である。

特に鹿児島牛ステーキは圧巻だ。

そして、この店の最大の利点は、店から駅にいたる経路に公園があることである。

「いい店やれぬ店」という自虐的なタイトルのこのブログであるが、この店だけは「やれる店」といえる。

少なくとも「やれた店」である。

3人が4人、セイコウしている。

だから、当店は?????(最高点)。

といっても、もちろん、公園でHしたわけじゃないですよ。

Hの最大にして最後の関門であるキスを公園でするのです。

で、今回はどうだったか。

うーん、そういう雰囲気にはなりませんでしたなあ。

やはり、4半世紀の年齢差は大きいです。

記事は、だいたい毎週金曜日に書かれている。

4月の最後の金曜日を見ると、「アール」というタイトルだった。ロイヤルホテルの最上階のバーの名前だ。

写真には、緑色の液体の入ったカクテルグラスが二つ写っている。

<アール> 4月28日(金)

某テレビ局若手女子社員と、フレンチを食した後、9時ごろ訪問。この店は、夕方から飲み放題のプランがあり、メチャクチャ込んでいてうるさいが、この時間だとすいていて、なかなか素敵だ。窓際のカウンターに案内される。

夜景が美しい。

二人でギムレットを注文。

食事中、「長いお別れ」の話題で盛り上がったからだ。

ギムレットの味は、可もなく不可もなくだが、美少女と飲めば何だっとうまい。

テリー・レノックスについて語りながら飲むギムレットなら、なおさらだ。

2杯目を飲んでしまうと、相当に酔いが回り、彼女にキスしたくなかった。

彼女は僕にしばしばボディ・タッチをするのである。経験上、キスしてもいいムードなのだ。

よっぽど帰りのエレベーターの中でキスしちゃおうかと思ったのだけれど、最初のデートでそれをしたら、取り返しのつかないことになるおそれもある。

外見も中身も最高の女の子なのだから、ここは慎重に行こう。

というわけで、今日は「やれぬ店」だったけれど、このホテルのエレベーターでは、過去に何人かとキスしました。

なので、実績からすると、評価は????。

私は、胸が苦しくなってきた。

その下にあるのは、バーに行く前に食したというフレンチの記事だ。

どうやら、これがこのブログの最初の記事らしい。

白く細い指で持たれたシャンパングラスの写真。

きれいな気泡が見える。

<ラ・ヴォアール> 4月28日(金)

某テレビ局若手女子社員(入社2年目)と訪問。

ダメモトで誘ってみたら、なぜかすんなりオーケーしてくれた。

こんな美少女と食事できるなんて信じられない、というくらい的美少女である。

しかも、この子は話していて感動的に楽しい。

太宰が好きだと言うのだ。

たとえばどんなのが好きなのかと聞いたら、「きりぎりす」と答えた。

まいったね。

会話が成立するかどうかは、年齢の問題じゃない。

さて、この店は開店時から常連。

リーズナブルで美味しく、最初のデートに最適だ。

けれど、今日は店内にコバエが飛んでいた。

最悪。

もう来るのやめようかな。

彼女は美味しいと言ってくれたけど、僕は、料理の味も落ちたように感じた。

だいたい、この店にはいろんな女の子を連れてきているけれど、

やれたためしがない（やってから連れてきた女はいるけどね）。

まさに「いい店やれぬ店」だったわけだけれど、コバエが飛んでるようじゃ、いい店とも言えないな。

というわけで、？は1つだね。

私は、身体が震えだした。

間違いない。

これはあなただ。

私は、葉子に電話をかけた。

葉子はすぐに出て、「見た？」と聞いた。

私は、大きく深呼吸してから、「見た」と答えた。

「全部読んだ？」

「先週と先々週と、それから4月の最後の週だけ」

「それだけ読めば十分ね」

「でも、これがあの人だという証拠はあるの？」

「証拠？」

「そう、証拠」

「だって、ブログ読んだんでしょ？」

「限りなく疑わしいけど、100パーセントそうだとは言いきれないじゃない」

「ちょっと、順子、本気で言ってるの？ しつかりしなさいよ」

「だいいち、葉子はどうやってあのブログを見つけたの？」

「それは聞かない約束でしょ」

「教えて」

「無理よ。順子には見せられないけど、私の手元には証拠があるの。あれは間違いなく彼の書いたものよ」

「だから、その証拠を見せてよ」

「ねえ、あのブログに書いてあることは、あなたや探偵が目撃したこととぴったり一致しているのよ。先週の金曜日に幼なじみと『やぶ』と『琥珀』に行って帰り道でキスした男がこの世に二人いると思う？ 先々週も4月の最後の金曜日と同じ。そんな偶然あるわけないでしょう？ 刑事コロンボとか古畑任三郎だったら、もうエンディングテーマが流れてるわよ」

「でも、このブログを書いた人が実際の日付でアップしたかどうか分からないじゃない。一緒に食事した相手に読まれてしまうかもし

れないのに、やれたとかやれないとかいう文章をそのままの日付でネットに公開するバカがいるかしら？」

「一人いるのよ、そういうバカが」

「ほかの女と食事していることもバレちゃうのに、なんでそんな…。バレてもいいと思ってたということ？」

「よく分からないけど、突き詰めて考えればそういうことになると思うよ。でも、女の読者は来ないと思ってたのかもね。案外うかつな男なんじゃない？ とにかく、彼は女との食事についてリアルに報告しているのよ」

「でも、先々週、彼はロイヤルホテルで少女時代みたいな女の子と会って、タクシーに乗ったのよ。駅から歩いていける店にタクシーで行くかしら？」

「行くわよ。気の利いた男は駅で待ち合わせなんかしないわ。ホテルで待ち合わせてタクシーでレストランに行つて、帰りは駅まで酔いを醒ましながら歩く。途中、自然と公園を通る。大人のデートプランよ」

私は黙った。

葉子の言うことはいちいちもつともだった。

私もブログを読んだ時、間違いなくあなただと思ったのだ。

「ねえ、葉子はブログを全部読んだの？」

「え？ うん、読んだよ」

「あの人、何人の女と食事したの？」

「全部で7人だったかな」

「7人……！ それで、その……、誰かと寝たって書いてある？」

「それはないわ。キスしたのも、あの幼なじみの人とだけ」

「だとすると、どう考えたらいいのかしら？」

「どうって？」

「つまり、私以外の女とは寝てないわけでしょう？」

「だから？」

「だから……、確かに葉子にこのブログを発見してもらって、いろんなことが分かったけど、でもあまり状況が変わってないというか、決定的な事実が判明したわけじゃないというか……」

「寝てないけど、それはたまたまそういう結果になっているだけであって、寝たいとは思っているのよ。隙あらば口説こうとして、食事に誘っているのよ」

「でも、寝たのと寝てないのじゃ大きな違いがあるわ」

「ねえ、どうして、こんな男に執着するの？ 好色なのよ。ハイチ

ユウなのよ」

「ハイチユウ？」

「平中。ブログのタイトルよ」

「ヒラナカじゃないの？ なに、ハイチユウって？」

「たいらのさだふみ平貞文。平安時代の貴族よ。三人兄弟の真ん中だったから、平中というあだ名だったらしいわ。すごいプレイボーイだったといわれているの」

「葉子、なんでそんなこと知ってるの？ それ、有名な人？」

「そんなに有名じゃないわ。でも、芥川龍之介の代表作を一通り読

んだ人なら、たいてい知ってるわよ。『好色』という短編の主人公なの」

「つまり、あの人は、自分がプレイボーイだと言っているわけ？」

「そういうこと。ただ、芥川の小説では、平中はある女性に夢中になるんだけど、結局、口説き落とせないの。あなたの彼の言い方で言えば、やれそうでやれないわけ。で、ブログのタイトルが、いい店やれぬ店。そういう洒落もあるのかも」

「深いわね」

「感心してる場合じゃないわよ。いずれにしても、彼は女を口説くことに生き甲斐を見いだす男なの。絶対に別れるべきよ」

「このブログだけで、そこまで言えるかなあ」

「なに、のんきなこと言ってるの。彼は堀北真希に恋してるの。本気なのよ」

「そう書いてあったの？」

「そうよ」

「でも、その恋は成就するの？」

「え？」

「振られれば、私のところに帰ってくるんじゃないかしら」

葉子がおかを言おうとしてやめた気配があった。

長い沈黙の後、葉子は言った。

「ねえ、順子、明日の夜、探偵と一緒に彼を尾行しない？」

葉子と電話で話している時は、気丈に、というか、のんきに振る舞っていたけれど、一人になってみると、私は、かつてないほどの寂しさや悲しさ、恥<sup>づ</sup>かしさ、そして怒りに包まれた。

私は、これまでずっと無意識のうちに葉子を見下してきたのだ。ひどい話だけれど、女として、あらゆる面で優越感を抱いてきた。その葉子に、あまりにもみじめな自分の姿を見せたくなかった。そうしないと、私はもう壊れそうだった。

葉子は、それを分かっている。

葉子は、容赦のない言い方をする。

それは、たぶん私のことを思っていることなのだろう。でも、私は、そういう言い方をされると、反発しなくなった。葉子には分からない何かを、私は分かっていると思いたかった。

本当は、あなたのブログを読んだ時に、ああ、もう終わった、と思っただのだ。

けれど、少なくとも、論理的には、別の可能性もあった。

この期におよんでまだ希望をもつなんて、我ながらあきれさせてしまっただのだ。

私は、何のために探偵事務所にああなたの素行調査を依頼したのだらう？

何を知りたかったのだらう？

それすらよく分からなくなってきた。

今は、もう何も知りたくないというのが本音だった。

でも、このままあなたとつきあい続けるわけにもいかなかった。

それでも、まだ、別れなければならないという思いよりも、別れたくないという思いの方が強かった。

別れるためには、もっと決定的な何かを見なければならなかった。  
った。

翌日の金曜日、私は伊東さんに電話をして、今夜あなたが誰かと会ってレストランに入ったら連絡してもらおうことにした。

私は葉子と、K公園の中にある「ペペロネ」で6時半に会った。葉子はその店を指定したのだ。

私たちは、パスタを食べながら、あなたのブログについて話し合った。

「ねえ、順子、『長いお別れ』って読んだことある？」

「ない。そんな本、聞いたこともないわ」

「じゃ、太宰は？」

「中学の時、国語の教科書に載ってた『走れメロス』を読んだだけ。

『きりぎりす』なんて知らない」

「彼と話していて、そういう話題は出なかったの？」

「出たかもしれないけど、私、小説って読まないのよね」

葉子がため息をついた。

「ねえ、順子、よく聞いて。

彼は文学青年なのよ。

文学青年というのは、私の定義では、純文学を好む男の人のことだけど、そういう人って、とても少ないのよ。

たいていの男は小説なんて読まないし、読んでも歴史小説とかミステリーだけ。

45歳になっても太宰や芥川を読む男なんて、1万人に1人くらいよ。

あなたの恋した相手は、そういう珍種なの。

職場ではちゃんとコミュニケーションをとってしっかり仕事をしているかもしれない。

けれど、その仮面の下には、普通の人には理解できない孤独な精神が隠れているのよ。

彼が浮気しているかどうかとか、浮気性かどうかということとは別の次元で、正直言って、彼は順子の相手として適当だとは思えないよ」

文学青年のイメージとあなたは重ならないような気がした。

それに、人間の頭の中はみんな違うんだから、そんなこと言ったら誰ともつきあえないし、誰とも結婚できない。

恋愛には別の要素もある。

というより、別の要素の方が大きいはずだ。

「でも、文学の話はしなかったけど、私たちの間では、それなりに会話は成立していたと思うわ」

葉子は一拍おいて言った。

「ねえ、彼って、突然黙っちゃうことない？」

私はギョツとした。

「凶星？」

「だから何なの？」

「ひどいこと言うけど、ごめんね。その沈黙の意味は、怒り、あきらめ、軽蔑、後悔、嫌悪のどれかよ」

「ちよつと待って。私もこんなこと言いたくないけど、葉子に男のことなんて分かるの？ 男とつきあったことあるの？」

「ないわ。私の知識は全部本から得たものよ。でも、私の読書は質量ともに相当なレベルなの。広く深く、あらゆる本を読んできたのよ。たぶん、その辺の大学教授には負けれないと思う」

「そんな話、初めて聞いたわ」

「初めて言っただもん」

「葉子が本を読んでもところなんて見たことない気がする」

「本は一人の時に読むものよ。私、大学に入ってから本を読み始めたの。友達ができなくて、ずっと一人でいたから。私がさつき言っただことは、ある心理学者が膨大なデータから導きだした結論なのよ」

葉子がそんな博識だとは、にわかには信じられなかった。

でも、葉子の指摘は、私の心をグサリと刺した。

それを肯定しなければならぬ証拠はないのだけれど、否定できる証拠はもつとないのだった。

何より、彼がしばしば黙ってしまうことを、葉子が言い当てたことが恐ろしかった。

葉子の言ったことは、これまで私が疑問に思っていたことに対する一つの回答なのだった。

葉子の言い方には腹が立った。

でも、その感情は、一人でいる時に感じる、あの陰鬱な怒りとは違う。

話し相手がいるということは、幸福なことだ。

葉子との会話によって、私は自分の状況を多少なりとも客観的に捉えることができた。

「もしも葉子の言うことが正しいとすると、彼はどうして私とつきあっているのかしら？」

「傷つけるようなことは言いたくないけど、要するに、寝たいだけだと思っわ」

「でも、一度や二度じゃなく1年近くも寝たいと思うということは好きだということなんじゃないかしら？」

「それは確かに、そういう考え方はできると思っわ。彼は、嫌いな女と寝るタイプじゃない。でも、じゃあ、彼は葉子のどんなところが好きなのかしら？」

私は、最初の頃、あなたが私の脚やお尻をほめてくれたことを思い出した。

「私の身体が好きなのかもね。私は別にそれでもかまわないわ」  
私は精一杯の強がりと言った。

ところが、葉子はそれさえも認めてくれなかった。

「彼は、順子の裸をほめてくれたことある？」

私は絶句した。

あなたは服を脱いだ私の身体をほめてくれたことがない。

「もしなかったら、どうなの？」

「それは、順子の身体が彼の好みじゃないっていうことよ」

この鬱病あがりの旧友は、一体どこまで残酷になれるのだろう。

私は初めて葉子を憎いと思った。

けれども、その時、私は思い出した。

玉家で私の裸を見た時のあなたの微妙な表情を。

簡単なことだったのだ。

あなたは私の身体を見てがっかりした。

少なくとも、あなたの期待していたものとは違った。

だから、あなたは何も言ってくれなかった。

それだけのことだったのだ。

「私の身体が好みじゃないって……、どうしてそんなことが分かるの？」

「彼は、素敵なおとこを素敵だと言いたい男なの。それを自分の言葉で表現したい男なのよ。だから、言わないということは、思っていないということなの」

葉子の分析は、当たっているような気がした。

あなたにはそういうところが確かにある。

ほめる時は、照れることなくストレートにほめる。

逆に、決して、お世辞を言わない。

でも、どこが？ どこが気に入らなかったの？

私はそれを葉子に聞いた。

葉子は、そんなことは分からない、と前置きしてから言った。

「でも、いくつか思いつくことはあるわ。言ってもいいの？」

葉子とは何度か温泉に行った。

きつとまた何か恐ろしいことを言うのだ。

「言って」

「まず、順子はナイスバディだと思うけど、着やせするタイプなの。膝上丈のスカートをはいていると、すごく細い脚に見えるのよ。でも、腿とかお尻は意外としっかりお肉がついているでしょう？ そういうところが彼の予想と少し違っただんじじゃないかしら」

「つまり、彼は華奢な女が好きということ？」

「たぶんね。順子は身長もあるし、なんかちよつと重い感じでしょ。もちろん、私と比較すれば、華奢だし、軽いわけだけどさ」

「堀北真希や少女時代と比べると、グラマーで重いというわけね」

「そう。そして、彼女たちとの比較で言えば、もう1つ重要なことがあるわ」

「何？」

「葉子の身体は、10年前の方がきれいだった。お腹に少し贅肉がついてきたし、おっぱいも少したれてきた」

「それほど変わってないと思うけど……。そうだとっても、そんなの仕方ないじゃない」

「仕方ないわよね。でも、彼はそれを見えてくれないのよ。とにかく、彼は感動しなかったのよ」

「そんなに若い女が好きなのかしら？」

「結果的にはそういうことになると思う。でも、もし順子の身体が10年前と変わってなかったら、彼はほめてくれたかもしれない」

「どんなに努力したって、10年前と同じっていうわけにはいかないわ。それを要求するのは、無理っていうものよ」

「だから、結果的には若い女が好きっていうことになるわけ」

「でも、芸能人でもないのに、そんな若い子と恋人になれるわけないじゃない。本気でそんなことを考えているのだとしたら、バカだわ」

「そう。バカなのよ。あなたの彼はバカなの。そういうバカに惚れた順子は、もつとバカなのよ」

その時、伊東さんから携帯にメールがあった。

連絡が遅くなってすみません。

若い女性と7時にアイランドホテル最上階のレストラン＆バー「ヘンリー」に入りました。

「アイランドホテルって……、すぐ近くじゃない!？」

「大きな声、出さないの。今、8時だから、あと1時間は出てこないわね。こっちもゆっくりデザートを食べよう」

「ねえ、ひよっとして、アイランドホテルに行くことが分かったの?」

「まあね」

「どうして?」

「何度も同じこと言わせないで。聞かない約束よ」

それから、私たちは、ケーキとコーヒーを注文して、会話を再開した。

「順子と私を比べたら、たいていの男は順子の方をいい女だと考える。」

裸にしてみたなら、なおのこと順子を選ぶ。そう思ってるでしょう? 確かにそう。1000人中1000人がそうかも。

でもね、1000人に1人とか、10000人に1人とか、私の方を選ぶ男もいるのよ。

信じないかもしれないけど、男の子の好みというのは、実に様々なのよ。

それに、パーツによっては私の身体の方が素敵だと言ってくれる男

もいるはずなの」

「パーツ？」

「たとえば乳首。」

私の乳首は、小さくて、ピンクで、少女みたいにきれいなよ。

でも、順子のはかなり大きくて、かなり黒ずんでのん」

「ねえ。なんでそんなひどいこと言うの？」

何のために、こんな話をしているの？」

「ごめん。でも、順子が言っていていって言ったから……」。

私は、彼が順子の身体をそれほど気に入らなかつた理由として考えられることを言っただけ。

単なる推理よ。彼の好みについて推理しただけ。

順子の身体が大好きだって言う男はいっぱいいるわ」

私は今まで、身体には自信があった。

若い頃、海やプールでビキニを着ると、男たちはあからさまに私を見た。

チラリと眺めるといふ風ではなく、ジッと見つめ、胸や尻や脚を仔細に点検するのだ。

ポカンと口を開けて放心している男もいた。

その頃と今とはもちろん違う。

でも、男から見られた記憶が私の身体に刻み込まれていたし、自分ではそれほど体型が崩れているとは思っていなかった。

だから、まさか、自分の身体がたとえ一部分でも葉子に劣るなどとは夢にも思わなかった。

乳首が大きくて黒い。

言われてみれば、確かにそうかもしれない。

でも、今までは意識していなかった。

葉子の乳首がどんなだったかは、思い出せない。

きっと、葉子の太った身体をじろじろ眺めては悪いと思って、ほとんど見たことがなかったのだろう。

大きくて黒い乳首と小さくてピンクの乳首のどちらが男に好まれるか。

選択肢としては、大きくてピンクの乳首と小さくて黒い乳首も加えるべきかもしれない。

葉子がさっき言ったように、私の乳首を好きな男も何パーセント  
かいるだろう。

でも、一番人気は葉子の乳首だと思われた。

玉家で食事をした夜、煌煌とした明かりの下で、あなたは私の裸  
を見た。

少したれた乳房と大きくて黒い乳首。

ほめてもらえると思っていた自分が恥ずかしかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5497u/>

---

もう会わない。

2011年10月13日07時45分発行